

第4講：異文化伝道論 3—ブラジルから日本へ：在日ブラジル人の布教 中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

はじめに

本講座では、天理教のブラジル伝道の歴史を踏まえつつ、日本におけるブラジル人の布教活動に着目し、異文化伝道の実態と布教伝道のあり方について考察した。従来、ブラジル伝道に関する関心は、主として当地における天理教の歴史的展開や発展過程、布教伝道の実践に向けられてきた。しかし、ブラジルで生まれ育ち、日本とは異なる社会的・文化的背景をもつ信者が日本へ渡り、布教活動を行う事例については、十分に検討されてこなかった。そこで筆者は、日本に在住する4名のブラジル人に焦点を当て、日本とブラジルにおける宗教文化や社会的背景の違いから、彼らの布教伝道の実践にどのような特徴が読み取れるのかを明らかにした。

ブラジル伝道の歴史とトランスナショナルな信仰継承

まず、ブラジル伝道の歴史を概観した。戦前には、教祖40年祭に向けた「教勢倍加運動」の下、天理教南海大教会などによる「集団移住型」の海外布教が展開された。天理教は日系人社会への布教を中心に発展し、とりわけ大竹忠治郎によってブラジル伝道の礎が築かれた。戦後は、昭和26（1951）年のブラジル伝道庁の設立を機に日伯の教会間の連携が強化され、その後、天理教の土着化や異人種間結婚を背景として非日系人信者が増加した。また、「おぢばがえり」やブラジル人子弟による「おぢば」の学校への進学などを通じて日伯の信者間の絆が深まり、国境を越えた信仰継承が進展した。

こうしたブラジル人の動きを理解する上で、筆者はトランスナショナリズムという視点を念頭に置いて考察を進めた。トランスナショナリズムとは、国民国家の枠組みや国境を越えて、人々が複数の国家にまたがる社会的・文化的・宗教的なネットワークを形成・維持する現象を指す。ブラジル人の場合、日本での長期滞在の形態として、①天理教校・天理教語学院・天理高等学校・天理大学への進学、②天理教海外部での勤務、③自教会における青年づとめや女子青年づとめ、④布教の家への入寮、⑤教会関係者との婚姻（教会長・布教所長配偶者など）、⑥出稼ぎ就労が挙げられる。こうしたトランスナショナルな経験は、日伯の教会間の紐帯を強化するだけでなく、新たな異文化伝道の実践を考える上でも重要な意味をもつ。

インタビュー調査から読み解く異文化伝道の実態

そうした観点から、筆者は2026年4月から7月にかけて、奈良県ならびに岡山県に在住する4名のブラジル人インフォーマントを対象に、それぞれ2時間程度の半構造化インタビューと質問紙調査を実施した。調査対象者は70代女性から20代・30代の男性まで幅広く、いずれも日系人であり、教内学校の在學生や教会本部従事者など、それぞれ異なる経験を有している。そのため、あらかじめ断っておくと、本講座では彼らの経験を単一の「異文化伝道モデル」として一般化するのではなく、その個別性を重視しながら日本とブラジルにおける宗教文化や社会的背景の違いを検討し、以下の3点を示した。

第1に、日本とブラジルにおける宗教文化の違いが、布教伝道のあり方や人々の教えの受け止め方に大きな影響を及ぼすことが示された。ブラジルでは、カトリック文化が生活のさまざま

な場面に浸透しており、多くの人々が幼少期から宗教行事に携わっているため、神や宗教について語ることへの心理的抵抗が比較的小さい。一方、日本では宗教について直接語ることが容易ではなく、まず相手との信頼関係を築き、その上で教えを伝えるという段階的な実践が重要になるとの指摘があった。また、天理教が日本発祥の宗教であることは、日本人への布教において理解を得やすい側面をもつ一方、ブラジルでは日本的な要素の強さがかえって不安や戸惑いにつながる場合もあるという指摘もあった。これは、教えの普遍性を前提としながらも、それぞれの文化や価値観に応じた柔軟な布教伝道の実践が必要であることを示している。

第2に、「布教伝道」を単なる教勢拡大の手段として捉えるのではなく、「おたすけ」の実践として位置づける視点の重要性が確認された。特に、異国の地における戸別訪問は、宗教文化や価値観の違いも相俟ってブラジル人に心理的な不安を与える。しかし、それを、さまざまな困難を抱える人々や孤立する人々に寄り添う「おたすけ」の実践として捉え直すことで、自身の意識や行動が変化する点が示された。また、ブラジル人が日本で直面する不安、とりわけ言葉の壁は、かつて日本からブラジルへ渡った先人たちの苦労を少しでも理解する契機となり、異文化伝道の難しさを痛感することにつながるとの指摘もあった。

第3に、日本社会のニーズに応じた布教伝道を展開する必要性が指摘された。例えば、少子高齢化や子どもの貧困問題に伴い、子ども食堂の運営や中高年の交流活動など、地域社会との接点を広げる社会貢献活動が重要である。また、信者数の減少により、家族内での信仰継承や若者から若者への伝道、少年会から学生会へとつながる継続的な人材育成も重要な課題となっている。これらはいずれも、異文化伝道において現地の社会・宗教情勢を考慮した上で示された見解であるが、とりわけ在日外国人労働者の問題については、日本社会への不適応や孤独感を抱える外国人に寄り添い、支援する布教伝道の実践についても言及された。これは、同じ外国人としての経験を共有しているからこそ、異文化適応や異文化理解の難しさを理解できるといった観点から示された見解である。

おわりに

以上を踏まえると、宗教文化や社会的背景の違いは教えの受け止め方や伝道方法に大きな影響を与えることから、「おたすけ」の精神に基づき、相手の文化や価値観に寄り添った柔軟な布教実践が求められる。特に、異国の地での布教伝道に伴う心理的な不安も、「おたすけ」の実践として捉え直すことで、布教師自身の意識や行動を変える契機となり得る。また、少子高齢化や信者数の減少、在日外国人労働者の孤立といった日本社会の現状に即し、地域社会との接点を広げながら支援の輪を広げていくことも、今後の伝道には欠かせない視点である。この日本とブラジルを往来する中で培われた信仰や布教経験は、教えを伝える側であるブラジル人自身が、異文化との接触を通じて新たな伝道の可能性を見いだしていく過程でもある。こうした経験を糧に、異文化理解と柔軟な対応力を備えたグローバル人材の育成こそが、今後の天理教の発展を支える重要な鍵となるであろう。